

まちの達人・三浦展と歩く センシュアス・シティ @荒川区

HOME'S総研の「センシュアス・シティ調査」(P27~参照)で全国総合第16位にランクインした荒川区。
決して知名度が高いわけではない同区の魅力はどこにあるのだろうか? 東京の郊外化についての研究を続け、
東京の下町を歩く散歩本も出版した三浦展氏が荒川区を歩き、その魅力を探った。

構成・文・写真/五木田 勉



写真/国土地理院

社会デザイン研究者
(株式会社カルチャースタディーズ研究所主宰)

三浦展

1958年生まれ。82年一橋大学社会学部卒業、パルコ入社。マーケティング情報誌『アクロス』編集長。99年カルチャースタディーズ研究所設立。
家族・若者・消費・都市問題などの研究を踏まえ、新しい社会デザインを提案している。著書『スカイツリー東京下町散歩』『大人のための東京散歩案内』
『東京高級住宅地探訪』『昭和「娯楽の殿堂」の時代』、共著『吉祥寺スタイル』『高円寺 東京新女子街』『奇跡の団地 阿佐ヶ谷住宅』など。



西日暮里駅集合

まち歩き当日、午前9時に西日暮里駅に集合。天気は快晴で、まち歩きにぴったりだった。三浦氏から地図を使って本日のまち歩きのコースについて説明を受ける。「荒川区が今回の調査で上位にランクインしたということで、私としてはとても興味深いものがあります。私は『スカイツリー東京下町散歩』を書いたとき、最も私の関心を引いたのが荒川区だったからです。

なぜかという、第一に、私のように社会学を学んだ人

間にとって、社会政策、社会福祉の実践の場として興味深い。第二は東京論的に面白い。私はかつて「第四山の手論」という視点で、東京の西側の山の手の住宅地を歴史的に四段階に分けたのですが、実は下町についても四段階に分けた「第四下町論」を提起しています。荒川区は主に大正時代に工場が増え、人口が増えた第三下町であり、労働者の街、貧しい人が多かった。だからこそ社会政策、社会福祉がいち早く実践されたのです」



1. ゆでめんと条里制

最初の目的地は旧小台通りにある商店街「小台銀座」だ。ここには三浦氏お勧めの場所があるという。

小台通りを北上して西尾久一丁目の交差点を左折。程なく右手に「小台銀座」と書かれたアーチが見えてくる。

商店街は旧小台通りに沿って発展した。しかし現在では廃業した店も多く、歩く人もそれほど多くはない。

「実に気持ちがいいですね。道がよい具合に曲がっているし、道幅もちょうどいい。この道は、江戸から隅田川を渡って西新井薬師に向かう道だったんですね。こういう古い道は、ただ歩いているだけでも楽しいですよ」

しばらく進むと右側に製麺所が見えてきた。看板には「いつもできたて うどん そば」と書かれている。





自家製の麺を販売する昔ながらの店

「昔は、下町の商店街には、こういう生麺の専門店がたくさんあったようです。はっぴいえんどのファーストアルバムのジャケットのイラストにもゆでめん屋が描かれているので、そのアルバムは通称『ゆでめん』と呼ばれていたんです。そのゆでめん屋は中野新橋あたりらしいんですが、高円寺にも昔ありました。東京中にあったんでしょうね」

さらに商店街を北に歩く。西尾久5丁目2番地と3番地の間にある道を左に曲がると、「条里の遺跡の碑」があった。ここがお勧めの場所だ。

条里制とは、古代の耕地の区画制度である。7世紀頃に制定された班田収授法に基づき、碁盤の目のように地割りが行われ、農民に分け与えられたという。

「以前ここにきたとき、遺跡を発見したのが人文地理学者の小田内通敏だと知って驚きました」

小田内は、戦前の郊外化を分析した名著『帝都と近郊』の著者である。現代の郊外化を研究している三浦氏にとって、『帝都と近郊』は重要な参考文献だ。

「荒川区は、第三下町になるまでは田んぼや湿地帯だったはずですが、そこに古代の遺跡があったという事実はとても興味深い。飛鳥山には豊島郡の郡衙があったのですが、



小台銀座商店街



条里の遺跡の碑



そこから下総国の国府に行く途中でこの条里制の地域を通ったという説があります。近代史とは異なる古代の視点で見ると、違う発見がありますね」

2. 阿部定、三業地、尾久の温泉

「次は、あの『阿部定事件』の舞台になった尾久の三業地に行ってみましょう」

遺跡の碑から、旧小台通りを横切って東に進む。さらに

小台通りも横断すると、その先が尾久の三業地があった場所だ。日本舞踊の稽古所、古びたたばこ屋の看板、玄関の引き戸、木製の窓の格子などに、ここが三業地だった名



残が感じられた。

三業地として栄えたきっかけは、大正時代に温泉が見つかったことにある。大正3年三業地の北側にある硯運寺(けんうんじ)で新たに掘られた井戸の水にラジウムが含まれていることがわかり、「寺の湯」として開業して人気を集めた。その後、温泉旅館や料亭が次々と開業。さらに芸妓屋も加わり三業組合に発展していった。

三業地があった場所からさらに東に進むと、南北に伸びる宮前商店街に出た。あんみつ屋や、演歌歌手のポスターが店頭を飾っている。

「荒川区は、山の手とは違って、苦勞が多い人生を生きてきた方が多いから。やはり演歌がピッタリくるんでしょうね」

商店街を抜けると、都内に唯一残る都電である「都電荒川線」が走る道路にぶつかった。右手には荒川線の宮ノ前停留場、左手には尾久八幡神社がある。まずは神社でお



この一帯に尾久の三業地があった



参りを済ませてから、宮ノ前停留場で都電の到着を待った。

都電荒川線の前身である王子電車は、明治44年に大塚と、桜で有名な飛鳥山の間で開業。王子稲荷、名主の滝などを訪れるための、いわば観光用の電車だった。さらに尾久で温泉が発見された前年の大正2年には、飛鳥山と三ノ輪間が開通して近くに停留場ができたため、尾久へのアクセスが良くなった。

大正10年の朝日新聞には、「滝野川の紅葉 尾久の温泉」という王子電車による広告が掲載されている。滝野川は飛鳥山付近での石神井川の別名である。飛鳥山は明治の大実業家である渋沢栄一の邸宅(別邸がその後本邸になったので)があった場所で、あえて邸宅を建てるほど自然に恵まれた場所だったのだ。また当時の滝野川は流れが急で渓谷には滝があり、秋には紅葉が美しく景勝の地として有名だった。尾久の温泉は、その滝野川と並ぶ観光の目玉だったのだ。

ちなみに王子電車は昭和17年に東京市に買収されて市電(東京市電)の一路線となったが、翌年に東京都制が施行されたために都電(東京都電)になった。戦後、交通渋滞解消や財政再建などの理由で都電は順次廃止されていたが、王子電車から引き継いだ路線のみ廃止を免れ、現在でも都電荒川線として走り続けている。

尾久八幡神社



宮前商店街のあんみつ屋



3. 洗剤の匂いと桜並木

宮ノ前停留場から三ノ輪橋行きの都電に乗車した。平日の10時台ということもあり、乗客は高齢者の方が多い。病院に行く人が多いのかなと思う。2つ先の東尾久三丁目で下車した。次の目的地は、町屋6丁目にある同潤会の尾久普通住宅だ。

「同潤会というと、青山や代官山のアパートが有名です。でも実際は、鉄筋コンクリートの集合住宅だけでなく、木造住宅も多く建設しているんです。荒川区にはアパートも木造もありました。下町では、アパートは他に旧・下谷区、深川区、本所区にあった。木造は深川区にありました。これらは第二、第三下町です。関東大震災からの復興が目的だっ



宮ノ前停留場に到着した都電荒川線

たからです。木造住宅のひとつが、これから向かう尾久の『普通住宅』です。「普通」というのは震災直後に同潤会が建設した仮設住宅ではない、本格的な復興住宅という意味です」

停留場の北側から、S字にカーブしている細い道を北に向かって歩く。目の前に見えてきた少し広い道を横断して、先ほどよりもさらに細い道に入った。両側に家が迫るように建っていて、敷地内に足を踏み入れたような気がする。「ここに最初に来た時、荒川区の大きな地図を見ながら歩いていました。地図の上では同潤会に至る道が太く書かれているのに、実際は、両手を広げたぐらいの幅しかない。『この道で大丈夫か』と思いましたが、思い切って入ってみました。この狭さは、地図では表せない。実際に歩いてみて、はじめてわかることなんです」

当時、三浦氏は狭い道を歩きながら洗剤の匂いを感じ、「ドブ川にふたをした暗渠ではないか」と直観した。まち歩きが終わった後、明治44年の地図を確認したところ、まさにその道は水路だった。

「当時歩いた時は、洗剤以外にもいろんな匂いがしました。でも今日は、あまり感じませんね。建て替えが進んで、街がきれいになったからでしょうね。新しい家になると、密閉度が高まるから匂いがもれてこないんですね」

狭い道を抜けると、そこが尾久普通住宅だった。ただし増改築が進んだため、大正14年の完成当時に偲ばせる家は少ないようだ。住宅地を囲む道を東に進むと

「江川堀プロムナード」と書かれたプレートが建つ桜並木があった。江川は、歩いてきた暗渠である。

「この桜並木がいつからあるのか調べていませんが、西荻窪や赤

家と家の間の狭い道を進む



羽、荏原などの同潤会にも桜並木があります。同潤会は、理想的な郊外都市を目指して桜並木をつくったんですね」

尾久普通住宅の近くには古い酒屋、米屋、そば屋、自転車屋などが並んでおり、住宅地と商店が一体化していたことがわかる。

視察が終了したので、歩いてきた狭い道を少しだけ戻り左折。南北に走る道を南下する。第五峡田小学校の前を通り町屋方面に向かうと、目の前には町屋交差点の近くに建つ高層マンションが見えてくる。通りを歩きながら、三浦氏に、なぜ下町に注目してまち歩きを始めたのか質問してみた。

「7年前、当時はまだ建設中だった越谷市の巨大ショッピングモールのようなすを取材しました。帰りに浅草駅で途中下車して街を歩いていると、すごく気持ちがよかったんです。やっぱり、こういう街のほうがいいなと思いました。

しばらく経ってから、ある人と話をしている時に『最近、下町に知り合いがいる方がカッコいいですね』と言われて。たしかにそうだなと思いました。たまたま僕の知り合いには下町出身の人が多くて、面白い人が多いんですね。それに、今は、うちの町には新しいものがあるというより、古いものが残っているというほうが価値がある時代になっているのではないかなと思ったんですね。それで下町をもっとよく知りたいと考え、歩き始めることにしたんです」



江戸堀プロムナード



尾久普通住宅。
建て替えが進み当時は偲ばせる家は少ない





4. 弁天様と投げ込み寺

都電荒川線の町屋駅前停留場まで歩き、再度三ノ輪行きの都電に乗り、荒川一中前で下車した。この停留場は、平成12年に沿線住民の要望によって開業した荒川線で一番新しい停留場である。

都電に直交する道を北に向かって歩くと、ジョイフル三ノ輪商店街のアーケードが見えてきた。この付近は、明治時代までは水田と竹林しかない寂しい場所だった。大正2年に飛鳥山、三ノ輪間に王子電車（現在の都電荒川線）が開通。翌年には埋め立て整地され、大正8年頃から商店街として栄えはじめた。

商店街を横切ってそのまま少し進むと、右手に「中島弁財天」と書かれた赤いのぼりが立っていた。路地を入ると小さな祠があり弁天様が祀られている。弁天様は、この場所にあった弁天湯の女湯の脱衣所の中庭に置かれていたものだ。

弁天湯は大正時代に創業。関東大震災や空襲をくぐり抜け「都内最古級」と言われていた。しかし東日本大震災で配管などに被害を受け廃業が決まった。その際、商店街

が中心となり寄付を集め、祠を設置したという。おかげで以前よりも多くの人々が、弁天様の姿を目にすることができるようになったのだ。

路地を戻り、もと来た道を進み次の角を右折。商店街と平行する道を東に歩く。普通の住まいだけでなく、歴史を感じさせる酒屋や魚屋がある。右手の路地を覗くと、道の両側には家々が並び、正面に商店街のアーケードが見える。



荒川一中前で下車。都電に迫るように
タワーマンションが建っている



ジョイフル三ノ輪商店街入り口



「4年前に歩いたときより、家が新しくきれいになってますね。古い町並みが好きな私ですが、荒川区などの木造密集地では、防災面からいって建て替えは仕方ないと思っています。防災性を高めながら、下町的な界隈性が残るのがベストですが」

商店街の裏側を堪能した後は商店街を歩いた。「商店街が栄えていた高度成長期にタイムスリップしてみたいですね。すごくイキイキしていたんだろうな。銭湯もあるし、さまざまなお店も家の近くに揃っていて、このエリアだけで生活できてしまう。子どもは路地を駆け回っていたんでしょうね」

ちなみに人口1万人あたりの銭湯数を見てみると1位が台東区、2位が荒川区、3位が墨田区である。銭湯は、今でも下町には欠かせない大切な存在なのだ。

商店街をさらに東に向かって歩くと日光街道に出る。右折して進むと右手に梅沢写真会館が入る古風なビルが。1階にはトンネル状の通路があり、入り口に「都電荒川線入り口」と書かれている。

「これは王子電車（現在の都営荒川線）の本社ビルだったので昭和2年に完成したものです」

次に日光街道を渡り、常磐線のガードをくぐるとすぐ左手に「投げ込み寺」として有名な浄閑寺がある。「投げ込み寺」の由来は、吉原の遊女が病死するとこの寺に運ばれてきたからだ。寺の中には供養塔を改修した「新吉原総霊塔」



ジョイフル三ノ輪商店街

がある。

この寺に遊女が投げ込まれたのは、近くに小塚原の処刑場があるような都市の周縁だったからだろう。同時に、宗派が浄土宗であることも関係しているのかもしれない。

浄土宗の開祖法然の生涯を描いた『法然上人行状絵伝』には、遊女にまつわる話が描かれている。遊女たちが法然の元を訪れ「罪深い身となってしまった私たちは、どのようなつとめをすれば後の世に救われるでしょうか」と問うた。法然は遊女たちの境遇をふびんに思い、「ひたすら念仏を唱えなさい。そうすれば疑いなく往生できるでしょう」と答えた（参考文献：大橋俊雄『法然上人絵伝（下）』岩波文庫）。浄閑寺の往時の住職も、吉原の遊女の境遇を思い、できる限りのことをしたのではないだろうか。



祠の中には弁天様が



ここはかつて王子電車のビルだった



浄閑寺の新吉原総霊塔



5. 煉瓦塀は何を語る

昼食後、三ノ輪橋停留場の北に位置する「荒川ふるさと文化館」を目指して歩き始めた。南千住警察署前の信号を渡り、しばらく進むと左手に野球場が見えてくる。

「この一帯には官営工場の千住製絨所があって、主に軍服に使用するラシャ布（ウール生地）が製造されていたんです」

明治12年に完成した工場は、戦後民間企業に売却されて昭和35年まで操業を続けた。なんとその2年後に、プロ野球が行われる「東京スタジアム」に変身した。

「千葉ロッテマリーンズの前身である『毎日大映オリオンズ』の本拠地だったんですね。しかし大映が倒産したこともあり、昭和47年に閉鎖されることになりました」

その後東京都が跡地を取得し、大半が荒川総合スポーツセンターとなった。その中に野球場が作られたのだ。野球場の北にはスーパーマーケット「ライフ」がある。その前に、



千住製絨所があった場所はプロ野球の球場になり、今では区の野球場に



千住製絨所の煉瓦壁

千住製絨所の敷地を取り囲んでいた煉瓦塀の一部が保存されている。

煉瓦塀から目指すあらかわふるさと文化館まで1分ほどだった。南千住図書館の中にある同館には考古・歴史・民俗資料がわかりやすく展示されている。その中には、先ほど見てきたばかりの浄閑寺（投げ込み寺）やその近くにあった小塚原の資料、さらに千住製絨所で製造されたラシャ布も含まれていた。また大正10年の「大東京鳥瞰図」が展示されていて、当時、荒川区は緑が多かったことがよくわかる。「王子電車ができたころは、荒川区の風景は、まだ古代条里制の時代とあまり変わらなかったかもしれませんね。たしかに行楽電車だったんだなとわかる気がします」

こうした田園風景を楽しめる絶好のスポットが、日暮里駅の西側の道灌山だった。道灌山は荒川区で一番高い場所で、北区の飛鳥山から台東区の上野公園まで続く上野台地の一部である。安藤広重が描いた道灌山の絵を見ると、眼下に水田が広がり遠くには筑波山も望める絶景の地だったことがわかる。

「一方、大正に入ると工場の数も増えていきます。ただし昭和12年の資料によると職工10人未満の工場も多く、10～50人の工場と合わせると全体の約9割を占めています」

同時に手工業も盛んになっていった。旧江戸の下町から



荒川ふるさと文化館の常設展示室



南千住図書館の建物。この中に荒川ふるさと文化館がある



移り住んだ職人が増え、生活必需品が製造されたのだ。こうした職人たちは、時代とともに様々な業種の工場で活躍するようになる。

「荒川区は技の街なんですね。下町というと今は下町情緒

だけが言われますが、下町の技が大都市東京の暮らしを支えてきたことがわくと、下町に対する見方も違ってくる気がします」

6. 映画館と駄菓子屋がある商店街

「このビルの2階には、日暮里金美館という映画館があったんですよ」

現在、荒川区内には映画館は存在しない。しかし、昭和35年には17軒もの映画館があった(『全国映画館名簿』全国映画館新聞社)。東日暮里3丁目にあるこの場所では、大正15年に第三金美館という映画館が営業を開始した。映画館は戦災で焼失したものの、戦後「日暮里金美館」として復活。同館は昭和48年に取り壊されマンションに建て替えられたが、2階に新たに映画館を設置して平成3年まで営業を続けた。

昭和30年代から40年代にかけて、夏休みにゴジラなどの映画が上映されると映

画館は満員になることもあったという。映画館の前の通りは「金美館通り」と呼ばれ、人の流れが絶えない商店街だった。商店街には数軒の駄菓子屋があり、そのうち1軒ではもんじゃ焼きを提供していた。それとは別に夏はかき氷、

冬にはおでんを出す駄菓子屋もあったという。当時の子どもたちはこの町で学び、遊び、育っていたのだ。

ビルの2階には、今でも「日暮里金美館」の文字が残っている。ただし取材時は改装中のためシートに覆われて見る事ができなかった。改装後は、文字の上に壁面と同じ色が塗られるものの、文字は外さずに残す予定だという。



このビルの2階に映画館があった

7. 同潤会アパートは姿を消したけれど…

次の目的地は、同潤会三ノ輪アパートだ。

都営荒川線の三ノ輪橋停留場から南に向かう。常磐線のガードをくぐり、明治通りを渡り、東日暮里一丁目公園の先の十字路を左折。次のT字路を右折すると、「かんかん森通り」と呼ばれる桜並木に出る。そのまま直進すると、右手に「BELISTA東日暮里」というマンションがある。ここが、三ノ輪アパートがあった場所だ。

三浦氏が10数年前に視察に訪れた際、すでに老朽化が進み、壁の一部がこぼれ落ちているほどで「建て替えも仕方ない」と感じたという。

「三ノ輪アパートは平成21年に解体されました。ちなみに荒川区には同潤会の鶯谷アパートもありましたが、これは11年に解体されています。25年には最後まで残った上野下アパートも解体されて、すべての同潤会アパートが姿を消



しました。同潤会という一大プロジェクトの記録として、なんとか一つでも残してほしいと思っていましたが残念です。

その一方で、三ノ輪アパート跡の近くで、新たな形の集合住宅が誕生しているんですよ」

かんかん森通りをさらに進むと、左手に「コレクティブハウスかんかん森」がある。設立は平成15年で、福祉施設「日暮里コミュニティ」の一部に28戸の賃貸集合住宅がある。特徴は、住人がゆるやかにつながることを目指して共用スペースが設けられていること。キッチン、リビング、菜園テラスなどの共用スペースは、住民の自主管理で運営されている。

三ノ輪アパートの跡地に建設されたマンション



「同潤会アパートには、単に住居を提供するだけでなく、都市の新しい生活の場として集合住宅を普及させる役割もありました。たとえば三ノ輪アパートや鶯谷アパートには設置されませんでした。共同施設が充実していることも同潤会アパートの特徴だと言われています。その理念が、三ノ輪アパートの近くで新たな



コレクティブハウスかんかん森がある日暮里コミュニティ

集合住宅として形になったのは、とても興味深いことだと思います」

8. 社会福祉事業、さきがけの街

次の目的地に向かうため、しばらく歩くと左手にマンションがあった。

「この一画には、大正8年に東京府社会事業協会によって建設された日暮里小住宅があったはずなんです」

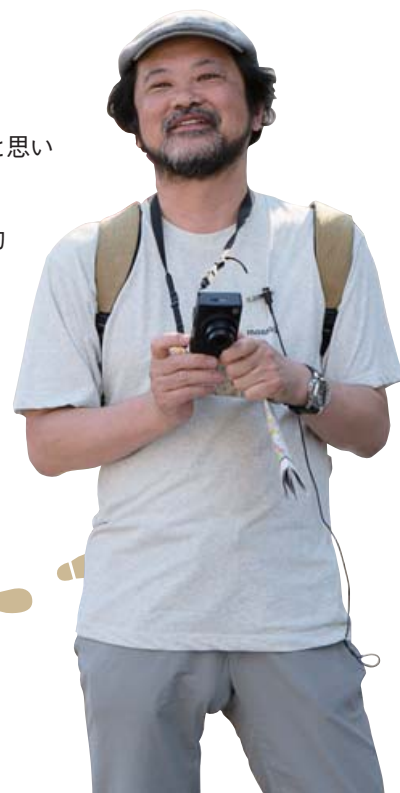
マンションの前には、古い灯籠が置かれ、棕櫚の木が植えられている。

「普通は、マンションの前に棕櫚の木を植えないし、灯籠を置かないでしょ。この土地が以前はどんな場所だったの

か？ 謎を解く手がかりになると思います」

日暮里小住宅の建築の目的は、低家賃で衛生的な住宅を供給することだった。

開所式が行われた翌日の新聞（東京日日新聞、大正9年1月27日）によると、



「中央に余地を置いて一棟毎に生け垣を巡らして間取りも良く台所、押入、水道などを完備」とある。さらに洗濯所付き共同浴場、米屋、公益質店、日用品供給所、託児所などが設置された。申込は200名を超え、そのうち41家族が住むことになったという。「小住宅内に託児所を開設したのは、日本女子大桜楓会です。桜楓会は日本女子大学の卒業生の組織で、キリスト教精神に基づく社会事業などを行っています。その桜楓会が大正2年に巣鴨に開設した託児所に続いて、2番目の託児所になったんです」

託児所では、大正10年に勤労女子のための夜学校を開設。また、近隣学童のための復習会も始めた(牧健一『スラムにおける保育所の誕生と発展』保育の友1959.6)。「この地域は貧しい人が多かったから家計を支えるため女性が働くことが当たり前だったんですね。また当時は十分な教育を受ける機会も少なかった。そういう状況の中で、桜楓会の託児所は社会福祉事業を展開していったのですね」

三浦氏によると、日暮里小住宅のように低家賃で衛生的な住宅を提供する事業は、同潤会によっても行われていたという。この一帯には、同潤会が不良住宅地区を改良してつくった共同住宅が残っている。

この地区には約300世帯の不良住宅があり、一人当たり1.46坪(約3畳)の広さしかなかった。室内は昼間も暗く照明が必要。路地の幅は一人がやっと通れるほどで、下水設備はなく低地に汚水があふれていた(『同潤会共同住宅居住者生活調査』昭和16年)



日暮里小住宅があったと思われる場所に建つマンションの前には大きな灯籠が



この劣悪な環境を改善するため、同潤会は土地に盛り土をして路地を拡幅した。さらに上水道、水洗式の便所を備えた近代的な住宅を建築して昭和13年に完成させた。「今では古ぼけて見えますが、当時は輝いて見えただろうね。あらためて荒川区を歩いてみると、社会福祉事業に関して先進的な取り組みが行われていたことに驚きます。その分だけ、苦しい生活を送っている方が多かったわけですね」

その背景には、三浦氏から説明があったように「荒川区は大正時代に工場が増え、人口が増えた第三下町で、労働者の街で貧しい人が多かった」という状況があった。そのことが、三浦氏の説明を聞きながら街を歩くことでよくわかった。同時に、そうした環境の中でも、人々がたくましく生き抜いてきたことも感じた。

住まいの近くに様々な商店や飲食店がある。また神社仏閣に限らず、この街の歴史を読み説く鍵が豊富にある。これらが自分の足で歩いて行ける範囲にあることが、荒川区の魅力につながっているのだ。



同潤会が不良住宅を改良してつくった共同住宅が立ち並ぶ





区長に聞く 荒川区民ハッピネス論

目指したのは じんき 人気の良さを守り育むこと

人気：その地域の人々の気風

荒川区では「幸福実感都市あらかわ」の実現を目指し、

荒川区民総幸福度指標（グロス・アラカワ・ハッピネス：GAH）を導入。

GDPでは測れない区民の幸福な生活を実現するために政策を展開している。

その一連の取り組みの背景にある哲学や今後の課題について、三浦展が西川太一郎区長にインタビューを行った。



区長 西川太一郎氏

1942年荒川区生まれ。早稲田大学商学部卒業。1977年東京都議会議員初当選（以後4期連続当選）。1993年衆議院議員初当選（以後3期連続当選）、その間防衛政務次官、教育改革国民会議国会議員代表、経済産業副大臣など。2004年荒川区長に就任、10年間で1000を超える新規・充実施策を行い区の財政を16年ぶりに黒字に転換。現在、早稲田大学客員教授など。

●荒川区の魅力はじんきの良さ

三浦 私は、4年前に東京の下町の散歩本を出版いたしました。その時に荒川区をだいぶ歩いて、面白いまちだと思いました。その面白さは、渋谷や原宿とは全く違うわけですが。

西川 そうですね。親の代からここに住んでいらっしゃる方の比率が高いし、職住近接で自己完結型のまちですから。

三浦 いわゆる下町で、労働者の方もたくさん住んでいらっしゃる。歴史をふりかえると、明治以降工場地帯になり、

貧しい方が多かった地域ですね。そのため様々な社会政策が打たれてきましたし、同潤会の不良住宅改良事業も行われた。大正8年、日暮里の不良住宅改良のために「日暮里小住宅」が建築されました。そこに日本女子大の桜楓会が託児所をつくったり。この地域では、ずいぶん古くから社会福祉的な活動が行われてきたんですね。

西川 そうです。上智大学がつくった隣保館（貧困や教育などの問題がある地域で、住人を援助する社会福祉施設）もあります。私が通った保育所も隣保館でした。私は比較的裕福な家に育ちましたが、当時は隣保館以外に保育所が



なかったんですよ。

中学は文京区の学校に通いました。同級生がうちに遊びに来ると、みんな怖がって帰ってしまう。当時は、それぐらいすごいまちでしたね。でも恥だと思ったことはありません。こよなく好きですね。このまちが。

三浦 区長にとって、どこが魅力なのでしょう？

西川 ^{じんぎ}人気のいい人たちが集まっているからですよ。ほかのまちに住みたいと思ったことは、一度もないですね。嫌になったことも一度もありません。荒川区は、東北をはじめとした地方から来て定着した方が多いんです。私が若い頃は、県人会の活動が非常に盛んでしたよ。

三浦 自然に助け合いが生まれたのですかね。

西川 周囲の協力がなければ暮らせない風土だったのだと思います。近所の子どもに、あまった食事をふるまったりね。今では考えられませんが無尽講（参加者がお金を出し合い、お金が必要な人に貸す仕組み）も多くありました。まるで東京ではないようですね。

●幸福度の指標を導入した理由とは？

三浦 そうした良さを絶やさないためにもGAHを導入されたのですね。

西川 区の行政の責任者として、「荒川区の住民でよかった」と思っていた区政を実現したい。そのためにも、区民の幸福度を測定する客観的な指標が必要だと考えました。

三浦 区民の幸福度の向上のために、何が重要だとお考えですか？

西川 隣人や地域を思う気持ちや助け合いなどの「地域の力」が不可欠だと思います。地域の主体は住民のみなさんです。たとえば地域のお祭りの日には、区の行事を設定しないようにしています。あえて区が何もしないことが、結びつきを強めるために必要な場合もあるんですよ。

三浦 そうですね。区民の自発性が大事です。また、ホHOME'S総研の調査で、荒川区が16位に入ったのは「人づきあいがうまくいっている」というポイントが高いことが大きいようです。区長のお話を伺って、施策の背景に区長ご自身の哲学があることもよくわかりました。

ただ少し気になるのは、荒川区では30代の人口が

2005年から10年で2762人増えていますが、マンションに住む方が多いと思われます。そうした最近荒川区に流入した若い住民の方が、元々の住民の方とどう交流しているのか？という点です。

西川 たしかにそれは課題だと思います。荒川区は、自治会や町内会の加入率が63%と非常に高くなっています。それでも37%の方が、地縁組織とは無縁の暮らしをされているわけです。こうした方々に対してはPTA活動、スポーツ活動、文化活動などの場を提供して、地域とのつながりが深まるきっかけになるよう工夫しています。また、新しいマンションが増えたおかげで区の税収が増えた一方で、子育て支援や教育にかかる経費も増えています。

三浦 子育てにはどのような施策を打たれてきたのですか？

西川 待機児童解消のため、10年間で保育定員を約2000名増やしました。学校教育では、全ての小中学校の児童・生徒にタブレットパソコンを配置。また学校図書館の充実のために、全ての学校に図書館司書を配置しました。ほかにも2004年度から全小学校全学年で英語教育を実施しています。

三浦 古くから住んでいらっしゃる方は満足度が高いのだろうが、新しい方はどうなのだろう？と考えていましたが、区長のお話を伺って、お子さんをお持ちの親御さんも満足されているのだろうと思いました。

本日は、ありがとうございました。



区役所の入り口には「区が果たすべき役割」が掲げてあった



西川氏に桜楓会の日暮里託児所があったと思われる場所を説明



GAHを推進する荒川区 今こそ“なつかしい未来”への 分岐点である

千葉大学法政経学部総合政策学科教授

広井良典



1961年生まれ。東京大学大学院を修了後、厚生省に勤務。2003年から千葉大学教授。内閣府の幸福度に関する研究会委員、荒川区自治総合研究所地域力研究会客員研究員。公共政策、社会保障、科学哲学などを専攻。GAH政策に関わるなど荒川区とは関連が深く、共著に『あたたかい地域社会を築くための指標—荒川区民総幸福度（グロス・アラカワ・ハピネス：GAH）—』（八千代出版、2010年）がある。その他、『コミュニティを問いなおす—つながり・都市・日本社会の未来』（筑摩書房、2009年、第九回大佛次郎論壇賞受賞）、『ポスト資本主義 科学・人間・社会の未来』（岩波新書、2015）など著書多数。



写真／五木田 勉

荒川区をちょっと歩くと、そこが東京の他のエリアとはかなり異なる、独特の雰囲気をもった場所であることに気づくだろう。

たとえば荒川区役所の脇に小さな公園のようなスペースがあるが、そこでは60代くらいの数名の高齢者が三々五々に集まって将棋を指したりしている。最初にこの光景を見た時、一瞬ここはホームレスの溜り場かという思いがよぎってしまったのだが、それはいわば“港区的”な発想であり、そうではなく、要はふつうの近所の高齢者がのんびりとゆるい時間を過ごしているのである。

こうした場所は、東京のような大都市では——あるいは地方都市でも——あまり見られなくなっているが、このようなちょっとした「居場所」的な空間が街のあちこちにあるということは、小さなことのように見えて非常に重要な意味を

もっているのではないだろうか（ちなみに荒川区は面積あたりの銭湯や八百屋の数が都内一であるそうだ）。

似たような印象は、商店街の一つである「ジョイフル三ノ輪」や、あるいは南千住の団地エリアを歩く時にも感じられる。後者については、80年代後半以降に再開発され高層マンションも並んでいる地区ということで、私は豊洲のようなイメージを持っていたのだが、実際に行ってみるとそれは全く違っていた。豊洲的な、どこか人工的でよそよそしい感じ——それはそれで街の個性とも言えるが——とは対照的で、良き意味での「生活」の匂いや「コミュニティ感覚」とでも呼べるものがそこには濃厚に感じられるのだ。ちなみに南千住地区では、NPOの「千住すみだ川」が「隅田川妖怪絵巻」という絵地図のようなものを作っていて、まちの伝統文化や歴史的遺産を再発見する試みも行っている。



以上述べたような荒川区のカラーはどのような背景に由来するのだろうか。もちろん、大きくは荒川区が「下町」的な場所であり、また町工場や職人的な仕事場、中小企業などが元来多く、仕事と生活の場が近い「職住近接」的な傾向の強い地域であることは大きいだろう（近年はこの点も少しずつ変化してきているが）。

また荒川区の大きな特徴として、いわゆる「町会」の加入率が高く、町会を通じた地域のネットワーク活動が盛んというのも興味深い点だ。

たとえば荒川区の場合、ひとり暮らし高齢者の自宅の新聞受けの新聞が2、3日放置されていたら、配達業者から町会や区役所に連絡が行くような仕組みが作られている。町会とか自治会などといった存在は、戦後の日本では“古い時代の遺物”“息苦しい近所付き合いの象徴”のように言われる面が大きかったわけだが、むしろ近年では孤独死とか孤立といった問題がクローズアップされる中で、逆にその新しい意義が見直されるようになってきているのだ。

荒川区の魅力には、以上のような要素の他に、区が行っている「政策」も関係している。その象徴的な例が、近年荒川区が積極的に進めている「GAH（グロス・アラカワ・ハピネス。荒川区民総幸福度）^[1]」に関する政策で、私自身、荒川区とは特にこの関連でここ数年ずっと関わりをもたせていただいている。「GAH」とは、その名の通り荒川区に住む人々の「幸福度」を高めていこうという政策で、知っている人は日本ではまだ少数だろうが、実はこれは世界的にかなり注目されてきており、この関係でフランスや韓国など諸外国から荒川区を訪問する人も増えているのだ。

たとえばGAHの関係で、荒川区がいち早く取り組んだテーマの一つに「子どもの貧困」問題がある。これは最近全国的にも議論されるようになってきている話題だが、格差が親から子へとバトンタッチされて累積していくと、社会や地域はどうしても階層化が進み分断され、コミュニティも解体していく。したがってそうした貧困を是正する区の取り組みなどは、荒川区の街で感じられる「コミュニティ感覚」の基

盤のひとつにもなっているのではないかと。実際、外国人の住民の割合が高い一方で、（意外に思う人もいるかもしれないが）荒川区の犯罪率の低さは東京都の区の中でベスト3に入るといっても以上と関係しているだろう。

もちろん荒川区もいろいろな課題を抱えている。先ほどふれた「ジョイフル三ノ輪」商店街は、残念ながら一部にシャッターが目につくようになっていて、日暮里の繊維問屋街も先日訪れてみると正直さびれてきているという印象があった。もう少し自動車交通の少ない歩行者中心の空間が増えてほしいという点もある。産業構造も変わる中で、荒川区が良き意味での“なつかしい未来”を実現していけるか、ちょうど今が大きな分岐点の時期かもしれない。そして実はそれは日本社会全体の課題とも重なるのではないだろうか。



^[1] GAHはブータンの「GNH（グロス・ナショナル・ハピネス。国民総幸福量）」の試みに影響を受けたものだが、豊かさや幸せをローカルな地域のレベルで実現していこうというところに独自の特徴がある。

